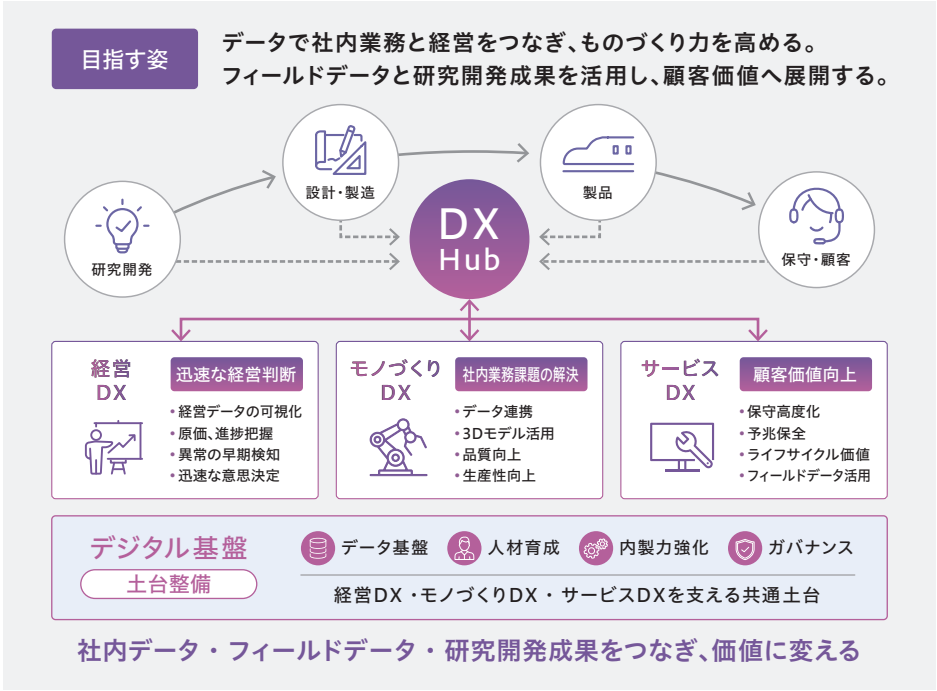


DX戦略

デジタル中長期構想の全体像



データで経営・ものづくり・サービスをつなぎ、企業競争力を高める

当社では、デジタル技術やデータの活用を個別業務の効率化にとどめず、経営、設計、製造、品質、保守・サービスまでをつなぐ全社的な変革へと発展させていきます。

「経営DX」「モノづくりDX」「サービスDX」の3つの領域を、それらを支える「デジタル基盤」と一体で推進し、迅速な経営判断、生産性と品質の向上、さらには製品納入後の新たな顧客価値の創出につなげます。

経営DX：データドリブン経営への転換

現在は、2027年度の基幹システムの刷新を起点として、これまで部門やシステムごとに分散していた財務・原価・在庫などのデータを統合し、経営情報をタイムリーに把握できる環境の整備を進めています。

今後は、現在の月次を中心とした把握やExcelによる集計から、週次又は日次でのデータ把握とBIによる可視化へ転換します。経営状況や変化を早期に捉え、迅速に次のアクションを打つことで、経験や過去実績だけに頼らないデータドリブン経営を実現し、意思決定のスピードと質を高めていきます。

モノづくりDX：全ての工程をデータでつなぐものづくりへ

設計から生産準備、製造、品質まで、ものづくりに関わるデータを一貫して活用する取り組みを進めています。現在は一部案件を中心に、設計段階で作成した3Dモデルを生産準備や製造まで活用し、設計・製造間の情報共有や作業の高度化を進めています。

今後は3D活用を一部案件から拡大し、ものづくりの各工程を3Dデータ前提で進められる環境を目指します。上流から下流まで一つのデータをつなぐことで、部門間で製品イメージや設計意図を共有しやすくし、認識違いや手戻り、不具合を低減します。これにより、リードタイム短縮などの生産性向上と品質向上を同時に実現し、ものづくり競争力の強化につなげます。

サービスDX：DXを活用した新サービスの開始

現在は、製品納入後のフィールドデータを新たな顧客価値につなげるため、製品の稼働状況や制御情報をリアルタイムに把握する仕組み、遠隔から製品を支援・操作するための基盤など、将来のサービス展開を支える仕組みの構築を進めています。

2030年に向けて、蓄積したフィールドデータを活用し、製品の状態把握から保守の高度化、さらに予兆保全へと発展させます。製品を納入して終わるのではなく、製品のライフサイクル全体を通じてお客様の安定稼働を支え、継続的に顧客価値を提供できるサービスへ進化させていきます。

デジタル基盤：全社でDXを生み続ける力をつくる

現在は、各DXを支えるデータ・システム環境の整備に加え、デジタルを実際の業務変革につなげる人材の育成を進めています。これまでに、各部門の実課題を題材とした伴走型のデジタル活用教育を約150名に実施しています。また、デジタル活用事例を全社で共有する「みんなのDX発表会」には、前年度は60チームのエントリーがあり本年度はさらに増える見込みです。

今後は、教育や生成AI活用の対象をさらに拡大し、2030年にデジタルを一部の専門人材だけが扱うものではなく、各部門が自ら課題を発見し、データやデジタル技術を使って解決できる状態を目指します。データ基盤と人材の両面を強化することで、経営DX・モノづくりDX・サービスDXを継続的に生み出す全社の変革基盤としていきます。

事例1 基幹システム刷新

経営DX：経営データの可視化、迅速な意思決定

当社では、業務標準化とデータ統合による経営基盤の強化を進めています。2027年度には、資材購買・財務に関わる基幹システムを刷新し、財務・原価・在庫などのデータを一元管理する予定です。

あわせて、経営指標の可視化や予測データの活用、EDIによる取引データのデジタル化を進めます。これにより、部門ごとに分散していた業務・データをつなぎ、経営状況をより迅速に把握できる環境を整備します。

今後は、蓄積したデータを意思決定やサプライチェーンの高度化にも活用し、リアルタイムかつデータドリブンな経営への転換を目指します。

	To Be　2027	Advanced　その先へ
データ基盤	分散していたデータをERPに統合 一元管理へ	データ基盤をBIツール基盤として整備・ 拡張し、生産活動を完全データ化 （データドリブン経営）
見える化	日次反映が可能、予測データも可視化可能 （ERPの帳票機能、ダッシュボード機能）	経営指標の可視化による意思決定の迅速化 リアルタイム経営へ転換
サプライ チェーン	EDI上で見積から納品まで取引可能 （取引先とのやり取りがデータ化）	EDIデータ活用により、サプライチェーンの 高度化

分断された業務・データを統合し、リアルタイムかつデータドリブンな経営基盤へ移行し、意思決定の迅速化と経営管理の高度化を実現

事例2 3Dを活用した製造

モノづくりDX：3Dモデル活用、生産性向上、品質向上

当社では、3Dモデルを活用し製品モデルを生産モデルへ展開することで、設計から生産準備までの業務プロセスの高度化に取り組んでいます。設計段階で作成した3Dモデルを生産準備まで一気通貫で活用し、設計・製造部門が同じ情報を共有することで、情報伝達の確実性を高め、手戻りの削減やリードタイムの短縮、品質の安定につなげています。



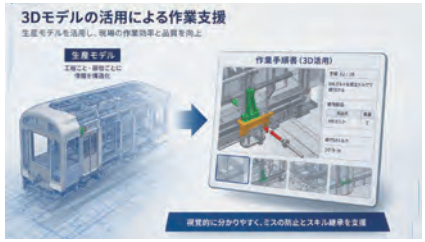
製品モデル

また、熟練者の知見を3Dモデルとして可視化・蓄積することで、技能やノウハウの継承にも活用しています。製造工程においても、3Dモデルを用いたデザインレビュー、CAMデータ作成、作業手順書の作成など、活用範囲を広げています。

今後もデジタル技術を活用したものづくりの変革を進め、生産性と品質の向上を通じて、持続的な企業価値の向上を目指してまいります。



製品モデルを生産モデルに展開



作業手順書の作成例

事例3 デジタル人材教育

デジタル基盤：人材教育

当社では、デジタル技術を活用して業務課題を自ら発見し、解決につなげる人材の育成に取り組んでいます。生成AIやローコードツールについては、座学にとどまらず、各部門の実課題を題材に解決方法をともに検討する伴走型教育を実施し、実業務での活用・定着を図っています。

また、データ活用の高度化に向け、岐阜大学の教授をオブザーバーに迎え、社内講師によるデータサイエンティスト育成教育を実施しています。当社の業務特性を踏まえた実践的な学びの場を構築しています。

さらに、社内のデジタル活用事例を共有する「みんなのDX発表会」を開催しています。各部署での予選を経て全社大会を実施し、2025年度は60チームがエントリーしました。優れた取り組みを共有・表彰することで、部門を越えた横展開とデジタル活用の機運醸成につなげています。これらの取り組みを通じて、デジタル技術を全社員が業務改善や価値創出に活用できる力として定着させ、持続的な企業価値向上を支える人材基盤の強化を図っています。



データサイエンティスト育成教育



全社みんなのDX発表会